

無料

ご自由にお持ち  
帰り下さい

2017.9

No.6

平和で豊かな沖縄県を目指す情報誌

# 沖縄協会だより



## 平和の絵-「戦争と平和」

20点連作一第3作

西村計雄 作  
花匂う海  
300号

〈制作意図〉沖縄戦にまつわる悲劇は数多い。その中でも1944年8月22日夜、奄美諸島悪石島付近でアメリカの潜水艦の魚雷に撃沈された沖縄の学童疎開船「対馬丸」の惨劇は、前途あるいたいけな子らただけに、人びとの胸は痛む。一瞬にして海のもくずと消えた1484柱の悲しみは、より強烈な平和への希求の姿となった。この地球上の戦争の惨禍(対馬丸事件)を数字で表現、その犠牲となった子供たちは永遠の白く清らかなビーナスと化し、平和を求めた掌は宇宙へ大きく広げられ、右上から平和を象徴するかぐわしくもゆかしい花束がさしのべられる。この構図は、戦争への冷徹な否定と平和への渴望を描きわけた。  
(昭和55年2月15日寄贈)

西村計雄 ■ 明治42年、北海道生まれ。東京美術学校卒、藤島武二に師事。1943年文展(現・日展)特選。戦後早稲田中学校と高等学校の教師を勤め、51年に42歳で単身渡仏する。ピカソの画商カーンワイラー氏との出会いを契機に、53年よりパリを中心にヨーロッパ各地で個展を開催。その作品は、フランス国立近代美術館やパリ市美術館に買い上げとなった。フランス芸術文化勲章、パリ・クリティック賞、勲三等瑞宝章、他受賞多数。北海道岩内郡共和町名誉町民、共和町立西村計雄記念美術館開館。2000年12月4日没。

沖縄  
平和祈念堂  
所蔵絵画紹介

沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年~47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設立された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂の管理運営をすることで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。



# 渋沢敬三を知っていますか

公益財団法人沖縄協会副会長 上原良幸

尚弘子先生の後を受け、沖縄協会副会長の重責を担うことになった。野村一成会長のもと、協会の円滑な運営を図りつつ積極的な事業活動を行うとともに、あらためてその来し方を振り返り、行く末を考えていきたい。

協会の沿革・活動等を追っていくなかで、ぼやけた戦後沖縄の歴史をクリアにするためにも、本協会の歩みにもっとスポットをあてべきとの思いが強くなったのである。

昭和31年、沖縄協会の前身である南方同胞援護会が設立される。米軍統治下の沖縄において、戦後処理として本来国がやるべきことを、外交上の摩擦を避けるため国に代わって行う組織団体である。対米折衝を通じて祖国復帰への県民の思いを代弁し、各種の調査研究や啓蒙宣伝活動を実施。また、戦没者遺家族への援護事業や医療福祉団体への支援事業および青少年はじめ諸団体の本土と沖縄の交流を促進するなど様々な活動を行った。

さらに、住民に身近な「子ども国」「少年会館」「くろしお会館」や「精和病院」「整肢療護園」「中央育成園」など多くの施設を整備し、復帰を機にそれぞれの団体へ譲渡している。これら事業は、施政権が及ばない厳しい状況下にあつて、可能な限り手を尽くした成果だった。しかし、米軍当局に対する配慮から、その実績を喧伝できるはずもなく、県民に広く知られることはなかった。

そして、南方同胞援護会初代会長の渋沢敬三のことである。大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した佐野真一著「旅する巨人」は、宮本常一と渋沢敬三という二人の人物像とその交友・交流を描いた力作だ。民俗学者・宮本のすごさと彼をはじめ梅棹忠夫、中根千枝、網野義彦など多くの学者を育てた民俗学の発展を支えた実業家で政治家で学者であつた渋沢の大きさを豊富な取材をもとに描き出している。続いて、佐野著「渋沢家三代」を読み、渋沢敬三という魅力ある人物への関心は高まつた

が、両著とも彼と沖縄の関わりには触れていない。どういう理由・経緯があつて援護会会長になつたのだろう。

「日本資本主義の父」である渋沢栄一の孫として生まれ、廃嫡された父に代わつて渋沢家を継いだ敬三は、第二次大戦末期に東条首相から日銀総裁就任を強く迫られ、敗戦直後の幣原内閣では大蔵大臣として戦災復興に取り組んだ。昭和21年、公職追放により職を辞すとともに、自ら創設した財産税として屋敷を物納。33間の大豪邸から、便所がくみ取り式の4畳半のボロ家に移つても、地位や財産を失うことが渋沢家の重圧からの解放とばかり「ニコニコしながら没落していけばいい」と平然としていた。

追放解除後、国際電信電話(KDD)社長となつた昭和28年、沖縄から屋良朝苗が東京在住の仲原善忠らと連れだつて、渋沢邸を訪ねている。沖縄の戦災校舎復興後援会の会長への就任を懇願するためだ。彼らは、誰がその任に

ふさわしいか分つていた。同居していた宮本常一は、「民俗学者の中には多少いるが、政治家や実業家で沖縄を知つてゐる人は殆どいない」と渋沢がつぶやくのを聞いた。彼は、会長を引き受け寄付金集めに奔走した。悲惨な地上戦の場にされたにもかかわらず、戦後の復興からも疎外された沖縄に対する強い贖罪意識があつたに違いない。

一方、民俗学者としての渋沢は大正末期に、西表から石垣、宮古、久米島、本島と島伝いに沖縄を巡つて「南島見聞録」を書き上げた。平易な文章と目線の低い観察眼に、その人柄が偲ばれる。沖縄を思い沖縄に寄り添つた陰徳の人・渋沢敬三、望むべくもないが警咳に接してみたかった。

彼の訃報に接した大宅壮一は「最後のエリートが死んでしまつた」とだけ言つた。享年67歳。「渋沢敬三を知っていますか」と、尋ね回ろうと意気込んでゐる私も、今年67歳だ。

平成29年度 勉学支援生の決定  
当協会が実施している「沖縄青少年勉学支援事業」は6月30日に応募が締め切られ、7月12日、当協会東京事務所では勉学支援金審査委員会が開かれ、厳正慎重な審査を行った結果4人を新規の勉学支援生にすることが決定した。本年度の勉学支援生は前年度からの継続者6人を加え、合計10人。一人あたり年額6万円の勉学支援金が給付される。昭和49年にはじまつた本事業は平成28年度末までに延べ1119人の沖縄青少年に支援を行い、500人が卒業し習得した資格や技術を活かして幅広い分野で活躍している。

沖縄関係団体等助成事業一  
沖縄県豆記者取材活動に対する協力  
当協会が沖縄関係団体助成事業の一環として毎年協力している沖縄県豆記者団(主催)沖縄県豆記者交歓会は7月31日から8月5日にかけて取材活動を行った。今年の第56次沖縄県豆記者団50人(小学5年生から中学3年生)は7月31日、羽田空港到着後、東宮御所を訪れ、皇太子同妃両殿下にご接見した。8月1日午前中は世田谷区を訪れ、保坂展人世田谷区長、堀恵子教育長、上島よし

もり区議会議長を表敬訪問取材し、午後からは総理大臣官邸に安倍晋三内閣総理大臣、豊田俊郎内閣府大臣政務官を表敬訪問し、総理官邸の見学について内閣府沖繩担当部局を訪ね取材活動を行った。質疑応答では、豆記者が沖繩政策について質問し、馬場竹次郎内閣府大臣官房審議官が丁寧に答えた。2日は国会議事堂見学を行い、



宮内庁提供

午後は都内を見学取材し、夕方には在京沖繩出身学生と懇談会を行った。3日からは北海道に移動し根室市等で北方領土取材を行い、8月5日取材活動を終了した。(同じく取材活動を行っている函館豆記者とは東宮御所での皇太子同妃両殿下ご接見、総理表敬、国会議事堂見学を一緒に行い交歓交流している)

**金城芳子基金の助成対象者を決定**

4月23日、当協会が主催す

る平成29年(第25回)金城芳子基金(沖繩女性のため、社会的に意義のある活動や研究調査活動に対する助成事業)は運営委員会(由井晶子委員長)を開催し、応募があつた11件の中から、特別養子縁組に関する研究を行う「おきなわ子ども未来ネットワーク」(代表:砂川恵子、山内優子、若松るみ)を本年度の助成対象に決定した。7月11日、県庁記者クラブで贈呈式が行われ、助成金30万円が贈られた。

**琉球大学家政学科同窓会基金の助成対象を決定**

5月8日、当協会の琉球大学家政学科同窓会基金沖繩の生活に関する調査研究及び社会活動に対する助成事業)は、平成29年度(第10回)隔年度実施)の選考委員会(尚弘子委員長)を開催し、応募があつた5件の中から、子育て支援、家庭支援に取り組み任意団体「西原ふみりーさぼーと」(代表:玉那覇一美代表)を本年度の助成対象に決定した。7月4日、県庁記者クラブで贈呈式が行われ、助成金20万円が贈られた。

**「高良義雄基金」の増額**

7月27日、勉学支援基金「高良義雄基金」を設置している高良義雄さんから指定寄付として10万円が寄せられた。これにより「高良義雄基金」は350万円となった。

これで「働きながら学ぶ沖繩青少年支援基金」の総額は6740万円となった。

**安倍晋三内閣総理大臣来室**

6月23日、安倍晋三内閣総理大臣が沖繩平和祈念堂を訪れた。安倍総理は、沖繩県主催「平成29年沖繩全戦没者追悼式」に参列のため来沖し、国立沖繩戦没者墓苑の参拝に続いて平和祈念堂に到着された。

平和祈念堂では野村一成当協会会長、上原良幸副会長、新垣昌頼専務理事が出迎えた。

出発に際し、安倍総理は正午の黙禱に合わせて行う平和の魂「放蝶セレモニー」に参加する沖繩平和祈念堂大使や児童生徒ら一人一人に気さくに声をかけ握手を交わし、そのあと記念撮影に応じた。



**てだこ学園大学院**

7月4日、高齢者の生きが

いづくりと、老人会など地域活動で核となる人材育成を目指す浦添市の浦添市でだこ学園大学院(38人)が、平和学習講座のため平和祈念堂を訪れた。同大学院では高齢者に講座等を実施している。一行は沖繩平和祈念像や壁面・美術館絵画を見学した後、事務所2階会議室で新垣昌頼専務理事による平和学習講座「平和祈念堂の思い」を受講し、熱心に耳を傾けた。



**NPO法人手話ダンス YOU&I 沖繩「わかば」による手話ダンス**

6月3日、NPO法人手話ダンスYOU&I沖繩「わかば」(宮里善江代表)が沖繩戦で犠牲になった全ての戦没者を追悼する手話ダンスを奉納した。

「わかば」に所属する10団体のサークルメンバーが、「ていんさぐぬ花」や「芭蕉布」など数曲をその歌詞を口ず

さみながら手話とダンスで表現し、来場した約100人の方々と共に戦没者への追悼と恒久平和を願った。



**沖繩平和祈念堂における平和学習**

沖繩平和祈念堂には年間多くの小学校から高等学校の児童生徒が訪れ、平和学習を行っている。(平成28年度は4万6067人) その一部を紹介する。

5月28日、宮古島市立南小学校(96人)の児童が訪れ、平和祈念集会を行った。集会は、生徒代表によるはじめの言葉、全員で平和を祈る黙禱、平和祈念堂職員による説明と続いた。その後千羽鶴奉納、生徒全員の群読で平和の誓いを声高らかに宣言し、終わりの言葉で終了した。

平成29年度 宮古島市立南小学校6年生 「平和へのちかい」 わたしたちは、忘れない

72年前 海に向こうから 僕たちの美しい町に 戦争がやってきた 幸せだった島は あつという間に 残酷な島にかわつた 鉄の雨が降り 町は燃え 真っ赤な血に染まり 家族、友だちが失われ 人々は幸せを失つた 沖繩戦を知り 悲しくなつた 私たちの心 心にひびく 悲しい思い 人はなぜ 戦争をするのでしょうか? 戦争で なせいろいろな人が 死なないといけないのでしょうか? 人と人が殺し合い 何が楽しいのでしょうか? 戦争で いったい何が 解決できるのでしょうか? 戦争 それは 人々の命や 大切なものをうばう ひさんなもの もう二度と あんな出来事をくり返しません 私たち一人一人が 「相手を思いやる心」 「お互いを認め合う心」 として「自分で考え行動する 勇氣」をもって 戦争ができない国をつくらなければならない 私たちは この海と 緑と 文化の 沖繩県を復興させた 人々の努力を語り継ぎ 平和の「おりづる」を 世界へと 力強く 羽ばたかせていくことを ちかいます

